

ウィリアム・ロビンソンの造園理論と展開 - 「野生」と「整形」の対立をととして -

中谷研究室
烏有園ゼミ
1X15A162-2 山下穂高

目次構成

【序論】

第0章 本研究について

- 第1節 はじめに
- 第2節 研究背景
- 第3節 研究目的
- 第4節 研究方法
- 第5節 既往研究

第1章 イギリスの風景式庭園の歴史

- 第1節 はじめに
- 第2節 英国庭園の発展
 - 1-2-1 宗教性 - 囲まれた庭 -
 - 1-2-2 政治性 - 整形式庭園 -
 - 1-2-3 整形に紛れる自然 - 風景式の兆し -
 - 1-2-4 開かれた庭園 - ハーハーの誕生 -
 - 1-2-5 絵画のような庭園 - ピクチャレスク -
 - 1-2-6 風景式庭園への批判 - ガーデネスク -
 - 1-2-7 野生な庭

第3節 ロビンソンの視点から見る英国庭園史

第4節 小結

第2章 『GARDEN DESIGN AND ARCHITECTS' GARDENS』にみるウィリアム・ロビンソンの造園論

- 第1節 はじめに
- 第2節 『GARDEN DESIGN AND ARCHITECTS' GARDENS』の概要
- 第3節 『GARDEN DESIGN AND ARCHITECTS ' GARDENS』の分析
- 第4節 小結

第3章 実作品における造園理論の展開

- 第1節 はじめに
- 第2節 ウィリアム・ロビンソンによる作品
- 第3節 エドウィン・ラッチェンスによる作品
- 第4節 ガートルード・ジーキルによる作品

第4章 考察

第5章 結論

【序論】


第0章 本研究について

第1節 はじめに

今日、庭の作り方や様式として、ガーデニングやイングリッシュガーデンといった言葉を多く耳にする。これらの源流へ興味を抱いた事が本研究の始まりである。


一概にイングリッシュガーデンといっても、その歴史は長く、その中で多くの庭園文化の影響を受けたり、また与えたりと、その過程で様々な変容があった。その中で私は、19世紀イギリスの造園家ウィリアム・ロビンソン (William Robinson, 1839-1935) による造園理論の提唱と、造園と建築に関する言及に注目した。また、それらの理論に影響された、建築家エドウィン・ラッチェンスによる建築作品に注目し、造園理論がいかに建築作品へと影響を及ぼしたのかを研究する。

またその過程において、整形式庭園の支持者であったレギナルド・ブロムフィールドとの「野生」と「整形」の対立における議論に着目する。




ウィリアム・ロビンソン
William Robinson(1839-1935)
イギリスの造園家。
自然本来の美しさを尊重した庭造りを追求した。

図1. ウィリアム・ロビンソン



レギナルド・ブロムフィールド
Reginald Blomfield(18469-1952)
イギリスの建築家、造園家。
整形式庭園を支持し、ロビンソンの論敵でもあった。

図2. エドウィン・ラッチェンス



エドウィン・ラッチェンス
Edwin Lutyens(1869-1944)
イギリスの建築家。
W.Rらとともに地方の住宅建築の研究を行う。造園家ガートルード・ジーキルと共同で住宅・庭園作品を多く手掛けた。

図2. エドウィン・ラッチェンス

第2節 研究背景

17世紀以降のイギリスでは風景画を描くように造るといふ、従来の整然と剪定された植木や、幾何学的に張り巡らされた道から形成される「整形式庭園」とは異なった、「風景式庭園」の考えが生まれた。しかし、その風景式庭園においてもいかにきれいな風景を庭に再現するかと、大部分が造園家などの手によってデザインされた物であった。そして、一見きれいな自然風景がひろがる庭園には、自然本来の植物の性質というものは希薄であった。

その中、19世紀に W.R は従来の風景式庭園のあり方を否定し、庭園は自然の性質を尊重するものでなくてはならないと主張した。そして、その思想をまとめた著書が『The Wild Garden (1870)』であり、庭における植物の存在意義や配置方法などを様々な種類別にまとめ上げられている。

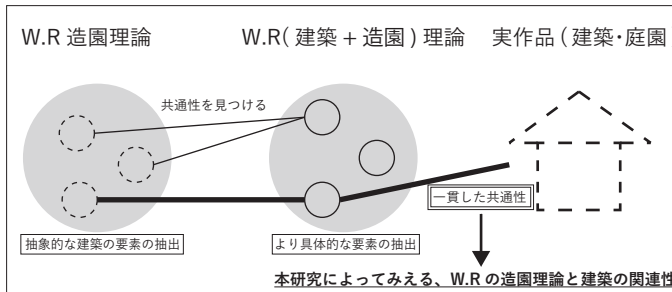
また、ロビンソンは建築と庭園、植物の関係性を説いた書籍も執筆している。『Garden Design and Architects' Gardens (1892)』では従来の風景式庭園の否定やロビンソンの求める建築と庭園の関係性が具体的な事例を織り交ぜ記されている。

0-3 研究目的

本研究では、ウィリアム・ロビンソンが掲げた造園理論の建築への展開に着目している。研究の目的は大きく分けて以下の3点にある。

- ①イギリスの庭園の歴史を整理することによって、ロビンソンの「野生的な庭園」の意義を明らかにする。
- ②『GARDEN DESIGN AND ARCHITECTS' GARDENS』の翻訳・読解を行い、ロビンソンの造園理論を明らかにする。
- ③『GARDEN DESIGN AND ARCHITECTS' GARDENS』と『THE FORMAL GARDEN IN ENGLAND』の比較を通して、ロビンソンの造園理論の特異性を明らかにする。
- ④ロビンソンの造園理論の以降の庭園や建築作品への展開を確認する。

つまり、本研究をもって、ロビンソンの造園理論における自然の活用と建築の間における繋がりを分析・考察することが目的となる。



0-4 研究方法

第1章

本研究で注目するウィリアム・ロビンソンの周辺の時代背景と庭園氏の概要をまとめ、イギリス庭園史におけるロビンソンの位置付けを文献調査から明確にする。

第2章

『GARDEN DESIGN AND ARCHITECTS' GARDENS』における各章における概要や、そこにおける『THE FORMAL GARDEN IN ENGLAND』の引用などをもとに、ロビンソンの造園理論において重要視する観点をまとめ上げる。

第3章

第1章、第2章で得られた観点に基づき、以降の造園家や建築家にどのように反映されてきたかを、実際の作品と比較することで確認する。

0-5 既往研究

本研究は、ロビンソンの掲げた造園理論の中に説かれた建築への言及を抽出する事で、今までの研究の中で希薄であった造園理論と建築の関係性を説くものである。

既往研究の一部紹介と、本研究の位置付けについて説明する。

■既往研究 (1)

橋セツ「庭園の野生と異文化」(神戸山手大学紀要 (11), 141-156, 2009)

『the wild garden』における野生と異文化という視点を重視して本理論の意義を研究。外来種の移入などをきっかけとした異文化とのつながりに注目。造園学による研究が中心となる。

■既往研究 (2)

石倉和佳「ワイルドガーデンの思想 - イギリス文化史の視点から -」(神戸県立大学環境人間学部研究報告 10, 121-129, 2008.03)

『the wild garden』の思想と、17世紀のイギリスにおける庭園論や庭を語る詩を比較検討することで、文学を通じた本理論の位置付けを行う。

■既往研究 (3)

片木篤「エドウィン・ラッチェンスの住宅 - 平面における軸構造の分析 -」(日本建築学会環境系論文集 404(0), 121-131, 1989)

E.L による住宅作品の研究。

【本論】

第1章 イギリスにおける庭園論

英国庭園の展開といっても、その歴史の中では多くの造園家や建築家が様々な様式を説いてきた。本章では、以下の項目に分けて簡潔にまとめていく。

1. 宗教性 - 囲まれた庭 -
2. 政治性 - 整形式庭園 -
3. 整形に紛れる自然 - 風景式の兆し -
4. 開かれた庭園 - ハーハーの誕生 -
5. 絵画のような庭園 - ピクチャレスク -
6. 風景式庭園への批判 - ガーデネスク -
7. 野生の庭

第2章 『Garden Design and Architects' Garden』にみるウィリアム・ロビンソンの造園論

第1節 はじめに

本章では、『GARDEN DESIGN AND ARCHITECTS' GARDENS』の内容と、本文中で引用されるレギナルド・ブルムフィールドの著書『THE FORMAL GARDEN IN ENGLAND』や、ジョン・セディングの『GARDEN CRAFT, OLD AND NEW』の引用をもとに、従来のイギリスにおける整形式庭園・風景式庭園との差異を明らかにし、ウィリアム・ロビンソンの「野性的」な庭園理論の概要を明らかにする。

第2節 『GARDEN DESIGN AND ARCHITECTS' GARDENS』の概要

・目次構成

1. 庭園デザイン	10. 「道」はまがっている！
2. 自然と虚偽の線	11. 唯一の園芸の可能性！
3. 「未開墾の自然」	12. デザインのない風景
4. 真のランドスケープ	13. 芝はランドスケープガーデンでない！
5. 庭園と建築の関係	14. BATTERSEA PARK の改善！
6. 時間と庭園	15. 自然と剪定された木
7. 庭園の正しい使い方	16. 自然に直線はない！
8. 規則的？な園芸	17. “Vegetable Sculpture”
9. 「自然」とは	

第3節 『GARDEN DESIGN AND ARCHITECTS' GARDENS』の分析

各章において、読解分析を行った。それよりロビンソンの造園理論において注目すべき項目で、「アプローチ」「平坦・安全性」「プライバシー・境界線」などが挙げられた。

ここで抽出したキーワードを用いて、第3章の実作品における分析を行う。

第3章 建築家による実践

第1節 はじめに

第1章・第2章においてまとめてきた、ロビンソンの造園理論とそこに含まれた建築理論がどのようなかたちで実作品に反映されたのかを、ロビンソン自身による作品や、彼に影響を受けた建築家や造園家の作品を通して確認する。また、それらの作品とロビンソンが批判した従来の作品を比較することで、ロビンソンの造園理論の影響を受け生まれた従来との建築物における差異を確認する。

ウィリアム・ロビンソン、エドウィン・ラッチェンス、ガートルード・ジーキルの実作品に注目し、第2章より抽出されたキーワードをもとに、ロビンソンの造園理論の実作品への展開を確認した。

第2節 ウィリアム・ロビンソンによる作品

ロビンソンの自邸である、グレープタイマナーの計画に注目する。下の写真は、参考写真の一例。



第3節 エドウィン・ラッチェンスによる作品

『House And Gardens by Edwin Lutyens』

エドウィン・ラッチェンスの建築作品集。

本章では、W.R.の造園理論に影響を受けた建築家 E.L.の作品集を通して、実際、ロビンソンによって述べられた造園と建築のあるべき姿がどのように建築に反映されたかを確認する。



第4節 ガートルード・ジーキルによる作品

第4・5章 考察・結果

本研究は、ウィリアム・ロビンソンの造園理論の概要を捉え、それが以降の庭園作品にどのような影響を及ぼしたのか、考察するものである。

第2章では、英国庭園の誕生から発展についての概要をまとめるとともに、各時代における庭園とロビンソンの造園理論を比較する事で、ロビンソンの造園理論の特異性を明らかにした。第3章では、『GARDEN DESIGN AND ARCHITECTS' GARDENS』の読解をもとに、ロビンソンの造園理論における重要な観点を抽出する事で、第4章での考察項目について確認した。

第4章では、第3章より抽出されたキーワードに基づき、ロビンソンの影響を受けた建築家や造園家の実際の作品を評価する事で、ロビンソンの造園理論の展開を確認した。

●参考文献・図版出典

〈参考文献〉

- ・ Mea Allan, “WILLIAM ROBINSON 1838-1935 father of the english flower garden” (faber and faber,1982)
- ・ William Robinson, “The Wild Garden” (scribner and welford,1870)
- ・ William Robinson, “Garden Design and Architects' Garden” (Jhon Murray,1892)
- ・ Reginald Blomfield,F.Inigo Thomas, “The Formal Garden in England” (London:Macmillan and Co.,1892)
- ・ Jhon D. sedding, “Garden Craft, Old and New” (London:Kegan Paul,Trench,Trubner and Co.,1891)
- ・ Sir Lawrence Weaver, ” LUTYENS HOUSE AND GARDEN” (COUNTRY HOUSE, 1921)
- ・ 大橋竜太『イングランド住宅史』（中央公論美術出版,2005）
- ・ 白石博三『ラスキンとモリスの建築論的研究』（中央公論美術出版,1993）
- ・ Gillian Naylor 著, 川端康成・菅靖子訳『アーツ・アンド・クラフツ運動』（みすず書房,2013）

〈図版出典〉

図1. Mea Allan, “WILLIAM ROBINSON 1838-1935 father of the english flower garden” , p.139

図2. Sir Lawrence Weaver, ” LUTYENS HOUSE AND GARDEN”

図3. 筆者作成

図4. 筆者作成

●論文構成

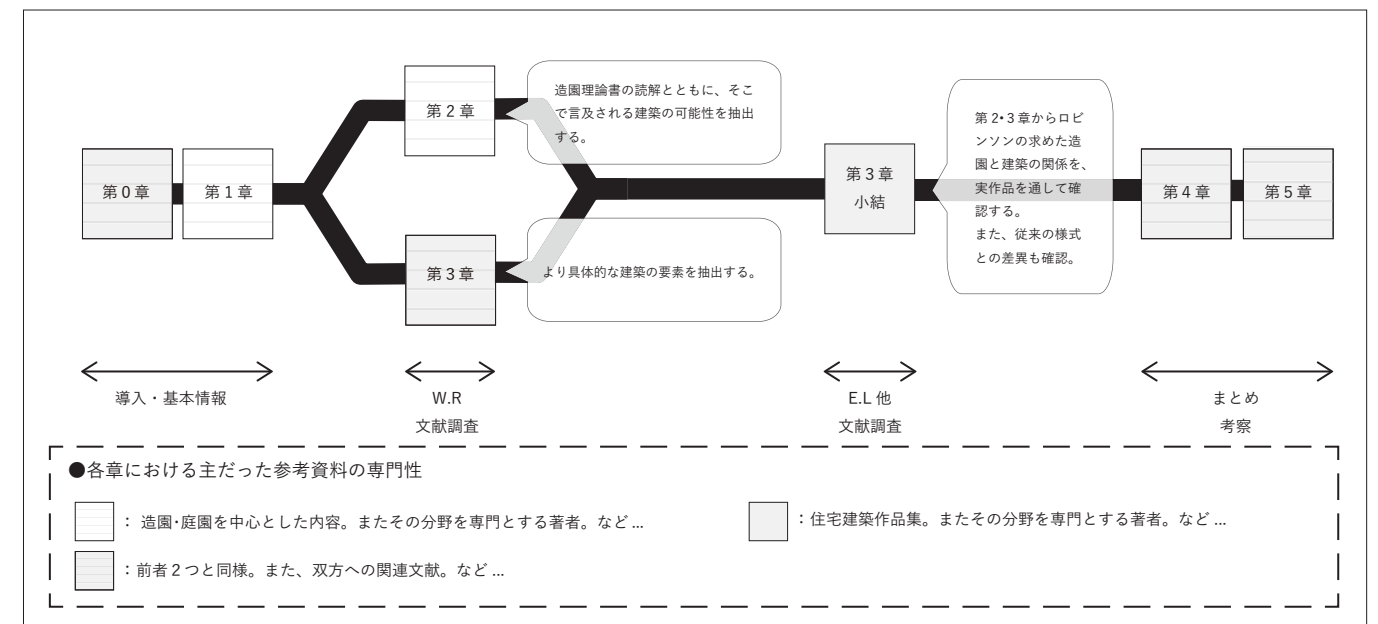


図4. 筆者作成